一つ目 黄昏ノイズ

ただしいものは強くない、強いから正しいののだ。

人なんてのは所詮は曲がりくねった一本道の迷路を散々迷い彷徨う生き物なのだと打ち棄てられ朽ちていく路端の廃屋が苔むし嗄れた声でそう言っていた。

世の中にはカミサマというものを深く信じる人もいる様ではあるが、そいつが作ったものの一つに俺がいるとするのなら十中八九不良品だろうな…

その日は有給を取らされて起きたのは昼過ぎのことだった。

俺の出自はなんて事ない普通の家庭の次男として生まれて悪目立ちも勿論良い目立ち方もせずに育つが生まれついて目付きが悪く

親に反抗心を燃やして「ババア、ジジイ」などという言葉も吐かずにやってこれた理由は定かではないが遊びと息抜きが下手でなった事との因果関係は未だ不明なままである。

さて、いわゆるサラリーマンになった自分は三十路になろうとしているのに何も成せずなれずに1DKのアパート(こんな場所)にいる。

まぁ、社会人ってのは来た仕事さえこなしていれば何も文句は言われないのだろうと高を括っていたが、お昼時に放送している奥様方向けのドラマが優しく見える程度には人間関係の浮き沈みが激しい。

さながら減点方式の罰ゲームを延々と繰り返しているかの様で、俺の点数は残り何点なのか数えてばかり…親元を離れて都会から離れた海辺の小さな町から2時間程掛けて通っている。

　疲れから来たであろう出勤日と有給休暇の混濁を乗り越えて意識は覚醒したが、体と心が黄色信号を点滅させているので暫く放っておけば惰眠を続けられる…

はずだったのが折からの冷気はばっちり講じたはずの防寒対策を突破しており、実はこれそのままなら凍死する危険性がありそうと判断した。

俺は手元のスイッチで暖房機を付ける、閉じたカーテンの隙間から呑気に差し込む明るい陽射しが実に鬱陶しい。

別に予定があるわけでもなく、起きた時間を気にするでもなく、視線をずらしてぼおっと天井を拝んだ。

「やることねぇなぁ…」

仕事のない日でも起きたら取り敢えずは顔を洗って眠気をリセットするのが習慣付いているので殆ど無意識に俺は鏡の前に居た。

営業職

俺は趣味と言えるほどひとつのことに熱中出来ない類いの人間だ。

長く続いた試しが無い、習い事でも勉強だろうとすぐに諦めがついてしまい、今日はなんとテレビもスマホも見る気力を失っている。

人に作られたものってのは受け手が情報を取捨選択するのではなく、情報が受け手を取捨選択している。

だから俺はそもそも情報を仕入れない、それなら健康に良いからと原価数円のサプリメントを買わなくて済む…

こんな屁理屈を言って俺は自堕落な休日を送りまたあの場所へ何も考えず通う…

入った会社も就業規則がまるで守られていないと言うほどでもないし。 それなりにものはもらっているが、縁もゆかりもまるで無い土地で住めば都と我慢してはや数年が経過している。

何か機会があればもう少し都心に進出したいものだが…

ただ家賃が相場より低い上に始発駅のため一本分早く家を出られれば確実に次の始発を待って着席出来るという点と景色が良いのはこの場所の利点でもある。

だがしかしアパートの窓から見える風景には流石に一ヶ月で飽きてしまう始末で、高台にあるのは良いんだ。

だけども駅から上ってこなくちゃ行けないというのが致命的な弱点だと言える。

帰りがなぁ…いきはよいよい帰りは怖い。 お陰様で家でなにかやろうとする元気を残せないのである。

「冬に行ったってなんの目の保養にもなりゃしねぇ、風は強いし降りていっても半ば観光地で飯は高い人は多いとこりゃあ家から出ませんぜぃ…」

近所付き合いもそこそこに自治会などの面倒事は輪番制なので新参ものにはまだ回ってくる心配もないので大丈夫なのだ。

絶賛暇をもて余す午前の終わり、とはいえ折角の有給なので無駄にはしたくない。

有給を消化しないと管理課から目玉を食らうので半強制的に上司に取らされて同僚から白い目で見られながら休んだのだが…あいつら怒ってんだろうなぁ…

日がな一日何もすることがない日は年寄り臭いが散歩にでも行くのが日課になっている、決まった所を行くのではなくてふらっと着の身着のまま気の向くままに俺は見知らぬ街を愛車である緑色のマウンテンバイクでゆっくりと散策する。

しばらくする市街地の人混みと車を避けながら進むとふと立ち止まって思う、この街はどこか余所余所しいのじゃないかと、

ここは静かで住民の皆がこの地に住むことを望んでいて各々が目的を達成する為に暮らしているような活気と歴史の交差する街で新鮮さもなければ確固たる信念は恐らくないのだろう…

それは言い過ぎだな。

しかしまぁ自分自身は ただ漫然と死までの時間を過ごしているのではないかと俺は見知らぬ空を見上げて白い溜め息を吐いた。

「何をしても駄目なときってたまにあるけれどあれだそれ今だわ…」

時間はあるので神社の御朱印集めができるという情報を聞き、俺は中学生の時からの相棒であるマウンテンバイクを転がしてみた…のだが三社目で時間外になってしまう始末、こりゃあなんとも中途半端な結果となってしまって失意の中で早くも傾いた太陽に恨み節を吐いて帰宅の途についていた。

貴重な休みなのだから一日寝溜めするか思いっきり活動するとかあるんだろうが今からでも休日を過ごした！！ と言える行動をしよう、

ま、適当に酒でも飲みに行きたいが連休というわけでもなし下手にアルコールが入ったまんま明日仕事に行く事は流石に出来ないので深酒できないしなー駄目やん、

知り合いもこっちには殆ど連絡付かない奴に急にこっち来いって言っても平日なので十中八九来れないだろし…そもそも今自転車なんだから飲めないっての、

「となると、また一人で寝酒かね」

完全な思いつきではあるがそのままアパートに戻るのも癪だったのでゆっくり自転車を走らせて俺は浜辺へ向かった…

時間帯もあれだし浜風で冷えた体は熱燗を一本作って干物を肴に温まりそのまま早めに布団を被ってしまおう、それがいい。

寒空を切る鳶には夜をともに過ごすものがいるのかともの悲しいさに浸る…そんな気も引き継ぎをしてきた仕事の進捗が気になっていつの間にやら何処かへ去っていった。

「自分でここまで来てなんだが冬の海なんて見てもしゃーないと思うんだけどな…」

まぁ、今日だけは水平線に沈み行く夕暮れを俺一人が独占出来るのであればそれもまた良いかね…？

流石にこの真冬と海側から来る風のある今日は地元の住民位しか知らないあの外れにある砂浜には誰もいないだろう。

地元の住人の一部はその浜を磯女の浜と読んで近づこうとしないが、文字通り黄昏時に黄昏るはうってつけの場所だ。

　暫くして北風が塩を含む風に変わると水平線と砂浜の先で夕陽が空を焼いて青色を茜に変えていた、まだ日没までは時間がある…しばらくここで黄昏に浮かんでいよう。

いやー人気のないこともさることながら穴場になっているこの浜辺へ足を運んだのはいつぶりだろう、最近は会社とアパートとの往復位しかしてなかったな…

「はぁぁ…洗われる様な汚い心を持った覚えはないがなんとも良い風景だな」

砂浜の入り口に日没までの数十分を一人で過ごす、冬の海の持っている物悲しい雰囲気も相まってこの世の終わりを待っている気になるってのは映画の見すぎだな、特に洋画。

黄金に広がる水平線に浮かぶ雲に赤色に傾いた西の空にいっそ吸い込まれてしまいたくなる。

「青春の馬鹿野郎ー！ってそんな大きな声は出したくないわ、疲れるし」

何に対して断りをいれているのか自分にも分からないが省エネと言われる。

今の若者にありがちな話ではあるのだが疲れることは出来るだけしなくない、何にも労力と意識を割いて生きていたくないのは果たして俺だけなのだろうか。

　根拠こそないものの、この歳になって人生経験なさと達成感のなさ、このからからになった自分の劣等感に虚無感はどうすればいいのだろう、

青春とかいう意味と意義の分からないまま突入した時期のせいにして俺は人生なんてものから泣いて逃げ出してしまいたくなる、

目の前に広がる海の雄大さが俺を感傷に浸らせ溺れさせていくなんてそんなわけないだろ、俺は通常運転で浜の砂を踏みしめていく…

吸い込まれそうな魅力のある落陽と夕焼けを滲ませて海色にしてしまう水平線、今俺はこの世に一人で生きている、あぁもういいか…別に俺がこの場から姿を消したとて困るのは実家の親位なもんだ。

正月に届いた地元の友人の年賀状に女友達だった奴と写ってその真ん中に見慣れない首も座ってねぇ乳幼児がおったってなんざ聞いてないし、何があったかなんて知りたくもないね！

あぁ、太陽にでも吠えてやろうかね負け犬の口上をさ！

俺は磯の臭いを感じながら冷ややかな空気で胸一杯に吸い込んで一気に全身全霊を持って…近所迷惑なんて考えずにカモメに届けようと腹に力を込めたその時だ、

…デ…コ…ノ……………サ…

「ゲッホゲホ！！グフッ！…む、噎せ…！？」

肺に吸い込んだ空気が何処かへ入る予定に無かった場所にでも入ったのか、それとも風に流れてきた空耳に驚いた。

突然その場で咳き込むと肺が水でも吸ってしまったかのように呼吸が出来ずまるで息が出来ないのでびっくりした一体なんだなんだ？！

しゃっくりが喉でつっかえて息が出来ないと後から考えるとそんな感じだったと言えるが…あの時はそれどころではなかった。

軽く酸欠になりながらも１度呼吸を元の落ち着いたものに戻せたので一先ず助かった、随分と気持ち悪い感覚もあったもんだ。

呼吸もろくに出来ずに一瞬、このまま死ぬかと思った。

普段ディスクワークが主だったしあまり声を出すことはしてこなかったが、だからって感情を吐露することすら許されないのか…えぇ、なんだこれ…笑えない、笑えないぞ、運動する要素のない生活は確かにしていたけどここまで低下していただなんて…

風がおかしな方向へふらふらと俺の周辺を飛び交う、なんて俺がこんなことで悲観的にならなきゃならんのだ…

「はぁぁ…馬鹿みたいだな俺は…」

この先仕事だけを考えて暮らせていけなくも無い…望まず・挑まず・考えずに非活動的三原則なんてただの惰弱と衰退しか産み出さないのだろう、それは仕事からリタイアした際に俺に死よりも退屈で緩慢な余生を送らせる気か…

絵から飛び出してきたかの様に見ていて不安になるほど綺麗すぎる風景だ。

こんなことで落ち込む様な奴でも必要もなかったはずなのに今日は不自然に思考がひとつの方向へ鈍化して体に鉛でも仕込んだかのようで重くなっていく…このまま何処かへ沈んでいってしまう…そんな気がする。

って身体機能がいつの間にか落ちていて呼吸困難で死にかけるとか死神でも笑わねぇよそんな「死因は…横隔膜断裂です」いやいや、何の前兆も無くそこ壊れたりするわけが無い。何かこれまでに予兆はあったか？

コ…ヨ………デ……

それにしたってこの断片的に聞こえてくる低い女性の声と思われる囁き声は一体なんだ？

何か下手に逃げたりするといけない気がして靴は濡れるが俺はそのまま波打ち際から少し海に入っている。

まさかとは思うが疲れ過ぎてここに来て何を変なことを考えんだろと

なにやらこんなことをしている自分がこのまま波にでも攫われて崩れ去って行けば良いのになどということをふと考えてしまって、

不思議と口元が上がってクスクスとひとりでに不気味な笑いがこみ上げてさ、一歩試しに歩き始めると意識とは逆の方向へ足がフラフラと動いてゆく、乾きと諦めを謳って潤いを求める体は…っておいおいおいおいフラフラと何処へ向かう気だよ。

こんなな行動と考えは馬鹿げてる、と頭のなかでは分かっているのに体は糸でもくっつけられた人形の様に乗っ取られて白波を靴で踏み始め、視線は沖の水平線で不自然に浮かんだ様に見える黒いヒトノカゲ…影でしか無いのにこちらへ手招きをしている様に見えた。

「なんかもうこれはあれだ…駄目だこれ…」

サ…キ……ナ………イ…？

手放したい不満と不安を含んだが黒く霧となって溜まる…溜まる、

まとわりつき、引き剥がし、自分を構成する物質を溶かしてゆく…どろどろとした黒い液体、

男が疲労からきたのであろう貧血が引き起こした目眩と立ち眩みの中で濡れた黒髪を垂らした顔の無い女に手招きされていた。

あれが幻覚だろうと迷妄だろうと俺の脳が憐れにも錯乱した結果だろうと俺にとってはどうでもいい。

例えこれ自分が死ぬ前の脳内麻薬であったとしても気にするものか、これが頭の防衛機能なのだろう、前々から神経が参っていることに今更ながら気がついたが…

自分の足元に刺すような冷たさよりも胸一杯に突如堰を切った劣等感と悪寒に押し流されつつあってその感覚は彼にはもう届かない。

オイデ…オイデ…オイデヨ…クルシイノハ…イヤダロウ…？

ウタカタノユメ…ソコニハナイヨ…

不自然に霞がかった意識は風に流れてきた空耳に志向して男の歩みを受け入れる。

さながらセイレーンにでも誘惑され虜になってしまった餌は自分の無価値さに気づいてしまった。

甘く、冷たく、静かに染み込んでゆくこれは…海風ではないナニカだ。

考えることは疲れる。慰めるものもなくかといって他人のふりを下へ見下すだけの厚顔を持たず不安定さに安住して精神の負荷を切り離したが…憐れな機械のなり損ないは紅染まる逢魔時に仮生の手にかかる…

我々の生は所詮胡蝶の夢、醒めぬ夢など無いのに罪を重ね合わせて先へ先へ…美しい水平線の向こうへ…

「もしもし…お兄さん、一体そんなラフな格好で亀の背にのって竜宮城にでも行くつもりですか？」

何かに肩を叩かれて遠退いていた意識が急激にに釣り上げられる。

胸から首に上がってきていた冷たい甘さが一気に冷えた浜風に変わり、俺よりは確実に年下の若い声が聞こえて我に帰ったわけだ。

振り向くと確かこの辺りにある高校生の制服を着込んだ少女が少し不安そうに俺を観察していた。

「だいじょ…うぶそうじゃないですね、何かあったんですか？

早く上がってきてください、目の前で普段着のまま冬の海に沈まれても大変夢見の悪い話ですので」

心配そうに声をかける少女を他所に胸に溜まった寒気と頭にかかった靄を払うのとを同時にできず今しがた起こった出来事が全く理解できずに案外自分の頭の中で混乱が起きているらしく少女との応対にしどろもどろしてしまっていたがこれは決して俺が女の人との会話が苦手だとかそんなことでは決して無いのだ。

「あぁ、平気だが…すこし目眩がしてしまってどうにも貧血になったらしい、最近あまり運動の方を積極的にしていなかったから急に砂浜でランニングなんてしてみたら動悸やら目眩やらで意識保つの危うくなるわ…いや～助かりましたよ~」

なんてだいぶ心にもないこと言ったぞ俺、ついでに営業スマイルなんかしちゃってどう見たっておかしいだろうその言い訳…苦し紛れとはいっても流石にそれは…

「あ…」大丈夫だ俺はわかってる。

無事に変人扱いされるんだーあーもぅ畜生め、

「あ…そうなんですか？ 昔とった杵柄を使って経験だけで行動すると体がついていかなくって痛い目にあうって父が言っていましたが腰は特に気をつけないと癖になるみたいですからね」

動機も収まってきたので少女の姿を確認しようと振り返るとそこには砂浜に似合わぬブーツに黒の暖かそうな黄土色のPコートを羽織った、髪の少し短い子が俺の肩ほどの小さな背でこちらを注意深く観察していたがしかし、髪の色よりも気になったのはその瞳の色だ、髪の色も色素が薄く茶色がかってはいるが瞳の色なんて緑がかっているそれに俺は驚いたがそんなことは少しも気にしない様子で彼女は話を続ける。

眠いのか表情はあまり豊かそうではないが、もしかしてそれは元々感情が現れにくいのかは定かではない。

「そう…か、ぎっくり腰とかにはくれぐれも気を付けるとしよう」

存外普通に反応が返ってきたな、てっきり引かれるかと思うくらいわざとらしい反応をしたんだけど。

「まぁまぁ、それはこの際置いときまして…こんなことで夕凪に体を冷やされて体調を崩されては大変ですから近くの暖める場所とか洋服を買える場所に行きましょう」

自分の住んでいるアパートからここまでは10km無い位だがズボンの膝下まで海水の侵入を許してしまったこの状態で海辺を自転車で走ってみろ…明日の欠勤は確定申告になってしまいかねない。

「ええと、ありがとうそれじゃぁ…な？」

土地勘が未だに無いので遭難などしないように携帯でGoogle先生に頼りながら行くしかないね

「…こんな時間に何をしていたのかはあんまり深く聞きませんけど…貴方因みにいくつですか？」「年齢？ 聞いてどうするんですかそんなこと」「敬語を使い続けるか否かの基準として有効ではありません？」「…なるほど」

とは言え少女の恰好や雰囲気から察するにまだ二十歳にもなっていないのではないだろうか、それならば俺がよっぽど童顔なのか…？いやいや、そんなこと無いだろ、いくら疲れた若者が多くなっているとは言ったって無精髭引き下げた学生中々いないっだろ…

平日のこの時間に学校の制服も着ずに君こそ何をやっているんだと言いたくなったが自分の実年齢よりも少しだけ見栄を張りたくなるのは恐らく俺の歳くらいからだと思う。

「三十路のおっさんだよ、残念ながらな」

正確には二十七だが三十路でいいだろう、合コン中の女じゃあるまいしこの年齢の男にはどうでもいい話だ。

「そうですかならば一応の敬意は込めましょう…ところでお名前は？」

一応ってなんだ一応って、さらりと個人情報を答えてしまいそうになって口を噤む。

何が目的でこの子は俺に名前とかその他諸々聞いてきたんだ？第一、この場所は地元の住民もあまり来ないって話じゃなかったのか？

「名前…教えてくださいますよね？」「俺の名前は寿限無」「冗談はそのやつれた顔位にしてください、もう少しで骸骨に見間違う位には顔色悪いんですから」

「し、初対面の目上の人にそこまで皮肉をいうのか…」「相手にされないので」

「ぐぬぬ…分かった。よしかわみなとだ、吉川南斗。どこにでもありそうな名前だろ？」

自虐しながら少女へ目線をやるとマフラーで半分隠れた口元が動いているようだが…何を呟いているかは全くの不明である。

「そうですか、でははたしも…私も名乗らなくては失礼になりますから…かさいなぎ、葛西凪です、あんまり周囲では聞かない名前ですね。

因みに学生ですけど自由制服の学校ですのでこんな格好なんですけどお兄さんは…高等遊民ですか？」

「うん…？高等遊民て、それニートですよね葛西君？」

「そうですか？果たしてものごとは言い様ですよ吉川さん、撤退は転進に全滅は玉砕に美化されますから」

「ちっとも肯定的になってないなそれ、それに付け加えていっておくと案外と土日休日の休みの業種ってあんまりないから」

へー、そうなんですかと関心の無さそうな生返事か聞こえてこいつは俺を目上に見てないなという結果がはっきりした。

「一応これでも年収も同期の中じゃそこそこある方なんだぞ、預金もある」

大人の張れる意地なんて金位しかないんだぞ。

「人は持っているお金で判断できませんよ、見えにくくともその心で判断するべきです。」「至言だな」「金言ですよ」

おかしいな、俺はこんなにも話している相手に対して身構えずにいれたのかと疑問が浮かぶ。

最近仕事先でしか声を発することなかったし、同期や後輩との関係もあまり突っ込んだものではなくて淡白なものだったので自分の思う最低限の文言しか交わしていなかったというのに…ナゼだろう、あの緑色がかった不思議な目を見ていると自分の心を見透かされているような見通されているような気がして言葉があとからあとから紡ぎ出されてしまう。

「さて、急がないと風邪ひいてそうですので移動しましょうか」

くるりと踊り子のように回れ右をして葛西は溜め息を白く宙に浮かべて俺の愛車(赤い自転車)のとなりに止まっている水色のちょこんとした小さな自転車、そういえば葛西平均より少し背丈の高い俺に対してかなり身長差があるよな…まぁ、高校生なんてまだ子供だしな、態度とかまだま背伸びしたいお年頃なのだろう。

「そう…だな、葛西さんよろしく頼む」

「ではではご案内しまーす」

ダウナーなのかドライなのかこの子はよくわからないな…

何でもない一日が夕暮れとともに終わろうとしている、あのままもしかしてなんて事は考えたくは無いが、自分は今本来であるならば海底で横たわり、魚の餌にでもなっていたのではないかと考えるとどうも背筋が寒くなる。

寒くなるというか…足の感覚無くなってきてるんだがこれは…どうしたものか。

「私、この時間になるとあそこの海岸へよくいくんですよ」

海岸沿いの道を高校生と思われる少女と自転車で軽快に漕いでいく。

俺の愛車のライトは白熱灯のぼおっとしていて、今にも消えそうで夕闇を照らせていない。

それ対して葛西さんの乗る最新の自転車に至っては三段ギアのLEDの電灯、なんとまぁ時代を感じてしまう。

「ほう、それまたどうしてなんだい？

確か御近所さん達はあそこは妖怪の棲む海岸とか言ってだけど…」

葛西さん曰く妖怪というのはオーバーにしてもあの海岸で死亡事故が発生しやすいのは確かでなんでも海岸の形状として離岸流が発生しやすいのだとか…それを妖怪と言わん気持ちは分からないでもない、未知というものに対して興味と同時に尊敬と恐怖を持つのがさも人間らしい…

「ふっ…あの砂浜にいるのが妖怪なら吉川さんはさしずめ悪魔ですね」

なんで悪魔呼ばわりされるのかは深くは聞かないでおこう…

　ゆらゆら交差する不規則な薄明かりと白色の無機質な光、夜の闇が冷たく舞い降りていくなかで時おり自動車が速度を上げて夕闇の静寂を切り裂いていく、

ポツポツと会話らしい会話を途切れさせながら安い量販店へ俺達は向かった。

「膝から下が控え目に言って感覚無いし凍傷とかしてる気がするんだが…これ大丈夫か？」

自転車降りるのにも一苦労だ、今は何ともない…凍傷とまではいかないがしもやけ位は出来てるだろうし…

「本当になんで真冬の海にサーファーなどでもない人が着の身着のまま入ってるんですか」

日頃点検をしているはずのわが愛車の足取りはかなり重い、

凍えて自分の両足は鈍くなっているのは確かにそうなのだが自転車の速度に比例する

電球のその明るさは行ったり来たりを繰り返す。

「意外と吉川さんは話すのお好きだったりするのですか？」

自分の話、今の就職先とか学生時代のちょっとした友人とのばか騒ぎした話など…面白いのか面白くないのかは分からないが葛西さんは適当な相槌を返してきたのをみるに聞くに耐えないような話ではなかったようだ、機会があったら後輩に同じ話でもしてやろう。

「うんうん、あまり好きって訳じゃあないな」

「あ…え、そうなのですか？ しかし人の経験というのは聞いていて自分に置き換えたり反面教師になったりしますから無駄にはなりません。全てが傾聴するに値するかは微妙ですけど聞いていて面白いと思ったので貴方はアタリです」「アタリとは…？」

「はい、文字通りの意味ですよ？」

なんか調子が狂うというか不思議な表現の仕方をする子だな…

「それより足は大丈夫ですか」「それより…ね」「えぇ、それより大事なことですので」

それ、俺の今までの話は要らなかったってことでいいのか…トホホ

葛西さんは海岸側と背後を一度だけ確認すると信号待ちで交差点の前で停止する。

正直足取りが重くなってきていて彼女が走らせる自転車に追い付けなくなっていたが単に足がかじかんでいるだけ…だよな？

あの綺麗な海岸に戻りたいなんて俺はちっとも感じてなんかいない…多分あんな不思議体験滅多にできるわけではないが今思い返すと不気味で足だ毛ではなく背筋がまで凍りそうな話、あの時葛西さんが現れなければ俺は今頃土左衛門になってふぐの餌にでもなっていたことだろう、縁起でもない。

「本当に大丈夫ですね？周りに…何か…いえこれ以上は止めておきましょう。」

葛西さんは一体なんの心配をしているのだ？

　自転車のスタンドを上げて店へ急ぎ適当な靴下とジーパンを購入しそのまま着替ることにした。

野口英世が二・三人旅立って思わぬ出資をしてしまったが背に腹は返られないからな…

「とほほ、休日だってのに散々な目にあったよ、明日も早いしちっとも休めてないわ…」

「それはそれ、これはこれですよ。物事は切り替えと諦めと度合いが大事なんだ…！ってさっき言っていたじゃないですか？」

「まぁ、理論上の実際に実現可能かは結構シビアなところあるからね？」

連れてきてくれたお礼にと店舗外の自動販売機で温かい飲み物をおごる、ミルクティーを取り敢えず買って葛西さんに何が良いかと聞いてみると

「あ、いえ…いただいて構わないのですか？」

と首を傾げるのが何ともあざとい葛西さんを横目に自分の分のカフェラテを買うと

「あの…すみません、私甘くないものの方がいいので今吉川さんが買ったものの方が…いいです。」

若い女の子って甘いものが好きなもんだとばっかり思っていたがどうやらそうでもない様だ。

「あ～そっかそっか、なら…そうだね、幸いまだ開けてないしこっちをあげよう、軽いけど付き合ってくれたお礼だな！」

軽く放ったスチール缶を少し前のめりになりながら受けとる葛西さんが、少しだけ可愛く見えた。

「んっ…暖かいですね…手袋越しでも伝わってきます。吉川さん、ありがとうございます。」

わざわざお礼までしてくれるとはなんとまあいい子だね。

俺の上司にも見習わせたいよ、絶対に謝らないし頭下げないんだよあの野郎…思い出したら腹が立ってきた、あの失敗っで俺が頭下げなぁったら…

「どうかされたんですか？なんだか苦虫を潰した様なお顔ですけれど…？」

「あー、いや別に何でもないよ？」

「何でもなくって考え事しているとそちらに夢中になってしまって自分でもなにをしているか分からなくなる、ってさっきもそうだったんじゃないんですか？」

「いや～なんというかあれはほら…魔が差したんだよ」「…魔が差したというより「魔に差された」というのが案外正しいのかもしれませんよ…？」

葛西さんはまた変な言い回しをするなと思いながらすっかり暮れてしまった宵の闇を見上げて空が少し高くなった気がする。

なにやら言葉に出来ない閉塞感の迷路からはまだ出られそうに無いけれど少なくとも終点の位置を確認出来たので良しとしよう、

俺達は買い物袋に濡れた服を入れて試着室を利用して着替えて店を後にする、

「今日はなんだか付き合わせてしまったみたいですまなかったね葛西さん？」

人と仕事以外で話したのは久しぶりでしかも女の子というのはなんとも新鮮だがこんな非日常的な体験はこれでいいのだ、さっさと安い発泡酒でも煽ろう。

「あ…そうですね、それでは吉川さん…この辺で」

ここまでこんなおっさんに付き合わせてちゃってすまないねと帰りの方向を確かめながら葛西さんに声をかけて俺はちっとも心の動かす必要のない安穏とした通常営業へもどることしか考えていなかった。

「…え？いや…あの…」

これまで口籠ることなんて無かった葛西さんが何故か口から言葉が出なくなった、饒舌多弁ではないけれどこの子は多分言いたいことははっきり言うだろうが何か言いにくいことでも有るのだろう…まさか社会の窓が！？

「よ、吉川さんの恰好が変だとかそういうことを言いたいんではないんです、ええっと…吉川さん…」

自転車から手を離して少女互いの距離を確かめる様に、自分の立場を確かめるように、少しずつ男に近づいていく、低く唸り声を上げる夜風が男の心拍を余計に駆り立てる、感情を少しづつ、少しづつ高鳴らせる…

「吉川さん、貴方は自分を見つめ直し自分を卑下して憐れみ、遠ざけ、憂うのは余り褒められたことではありませんからね、貴方を見ていると…なんだか不安になります。」

初対面の女の子にここまで言わせる男って中々いないと思うのだが

どっか木枯らしに吹かれて飛んでいってしまいそう…というのは流石に冗談ですか？！」

「私、おんなじ周期で動くので機械みたいとよく言われるんです。

もしかしたら…もしかしたら！来週もあの砂浜に立ち寄るかもしれません、お休みとかありましたら…その時はお願いしますね？」

俺の返事も聞かないままに葛西さんは一度だけ此方を向いて穏やかに微笑みを向けると急に恥ずかしくなったのかどうかは分からないけれど彼女の翡翠の瞳は宵闇へ残像を残しながら消えていった…

「…何だったんだろうか、今日の出来事は…？」

ポツンと冴えない男が一人、洋服の量販店の駐輪場に残された。

少しだけ遠出をしたばかりに折角の休日に午後から活動をしたらにわかに死にたくなり、奇行に走った末に女の子に救われて彼女にコーディネートされた服装でこんな場所に立っているなんて…

ここはどこのどの辺なんだろうかと携帯で確認したら海岸のさらに南で家から小一時間は確実に掛かる距離、正直足取りは軽くない。

「葛西…凪か…」

吐く息は白くすぐに夜に紛れてしまう、

さっきまでそこにいた自分より若い異性の姿はもうない。

久しぶりに煙草が欲しくなったのはなぜだろうか、買いにいこうとしてコンビニに寄ろうとも考えたが何時の間にやらスーパーにて自炊の準備をしているという不思議。

健康志向なぞしてどうなるんだというひねくれた悪魔の囁きを押し潰して適当に具材を集めて帰路へ着いた…

「しらかば～あおぞぉら、み～なぁみかか～ぜぇ」

かなり古い曲だがふと頭に浮かんだ曲を鼻唄を取り敢えず口ずさんでみる、

アパートの自室の鍵を開けて気の抜けた「ただいま～」の挨拶を久しぶりにした。

「夕飯は～水炊き～アヒルにあるのは～水掻き～」

余裕を持てる事を目指そうとするのはこの話には蛇足な気がするがもう少しだけお付き合い願おう、俺という諦めてばかりの人間が少しぐらいは何かを求めるようになっても…いいだろうか…。

何の気の無しに人は変わるものなのかと俺が後々思うきっかけになった物語。

因みに蛇足になるかもしれないが、俺はその後あの砂浜へ休みの夕刻になると気分転換を兼ねて自転車を走らせる事にしている。

「あ…またこんなとこまで来たんですか…え、散歩？

ふふ、相当お暇な人とみましたが、休日の夕方になってやることが散歩とは…というより自転車なのでどちらかといえばツーリングなのでは？

まさか吉川さんついに高等遊民の仲間入りを果たしたんですか？」

とまぁ少し嬉しそうな笑みを浮かべてある曜日の黄昏時、絵画から飛び出してきたかの様な輝かしい夕日の前に人知れずの白浜で青年と少女が物語を紡ぎだしていた。

そうこれはどこにもない、ここにしかない物語

この日常の続きはまた気の向いたらにするとしよう、これにてお開き。

二つ目 砂浜ウィンナーコーヒー

平凡という言葉は都合の良い言葉だ。日本人特有の謙遜の美学に己を落とし込み、この言葉に安寧と安定性を求める者が使う、

これだけ人の価値観が交錯しまた産み出されては消えていく今の世の中で「平凡」なんて消耗品でしかないんだろう、二十年一昔どころか三年ひと昔の時代を迎えている。

その中で取り残された自分は誰かの劣化版で廉価版だと流行り廃りに浸かってしまっては癖もなければ光るもの失い萎びた模造品に成り下がる。…なんてなんにも見出さない俺が言えた質ではないな。

こんなことをろくに考えるべきじゃないしなんたって今は期末の報告書に不備が見つかって見積もりをやり直すとかいう地獄のデスマーチの真っ最中なのであんまり深く物事を考えたくなくなってきたから放って置いてくれたまえ。

　耳に染み付いてしまったキーボードの入力する単調な音と溜め息に思考回路は破綻を期して朝日が昇りかけているのをすっかり忘れていた。

男たちが数人事務方の女子諸君を終電前に帰らせるという紳士的見栄っ張りなんてしなければ俺らは今頃当直室とかいう簡易ベットしかない部屋でワイワイできたかもしれんのに…無いか、

「にしたってアレですよね、他の課がいくら感染症や流行病でダウンしているからと言って今更報告書の不備が見つかって全員無事な俺たちの課が選ばれし者として残ったわけですがーー、

幹部連中すっごく安らかな顔をして俺らを見ながら上がっていきましたからもうこれパワハラで訴えていいですよね？こちらがパワハラだと思ったらなんでもパワハラでモラハラでセクハラなんですよきっと」

早口で恨み言を言うんじゃない、半分も理解できんぞ全く…

三人しかいない我が営業七課では現在二人体制で一人が休むというローテーションを二時間で回して後五時間しかない報告書提出期限を守ろうと奔走しているのである、それもこれも適当に判を押す上司と優秀かつ病弱な経理課が悪い、間違いを正す側がなまじ優秀だと面倒事で波及しかねないのだ。

「先輩、遂に空白んできちゃいましたけど僕ら本当に後五時間で帰れるんですかね？」

いいから、話す余力があるんならもっと他のことに注力しろよ、そんなにお喋りしたかったら噺家にでもなったらどうだ？ 男の俺から見てもルックス良いしイケメン噺家って少しくらいはうれるんじゃね？

「少しは反応してくれないと詰まらないですよ、別に庶務のOLさんみたくかまっちゃんしているわけじゃないんですから。

こうでもしないと自分のついて無さに悲しくなってきますから少しは楽しい話とかしましょうよ」

こんな状況で楽しい話なんて出来るかよ修羅場だよ、「修羅場」一徹になりつつある中で楽しげな話なんて出来たとしたら相当きてるだろそれ、

「お断りだ、隙があるんなら作業しろ作業、経理課の修正案をまとめて、上司が判を押した書類と照らし合わせて…これって文章改ざんって言わね？ これグレーなだけで問題ないよな、後で責任問題でウチラが矢面に立たされて全員の首がパッチンされるとかありえる？」

疲れているとネガティブな事をついつい考えてしまうことはありませんか？ って違うわ俺にかかれば何でもかんでもマイナスにしてしまうからこれいつものことだわ。

「すっごく安らかな顔をしてますよ先輩」「うっせ作業しろ作業、なんでもかんでもパワハラでくくれば正解なんだとしたら今の人は我慢を忘れすぎだろ」「お、答えたくれましたね先輩」「はいはい、分かったからなんで風邪引いて会社に来ないといけないんだろうなぁ、その御蔭でパンデミック発生してあの支部長ですら倒れたってのに仕事の続行をしろって無茶振りだよなぁ…」「あの人なんでも筋肉で解決できるとか言っておきながらぶっ倒れてましたからね」

パソコンのキーボードを叩く坦々とした音ともう幾つついたかも分からない溜め息が朝日が昇りかけている薄い色の青に溶かしていきたいだなんて交通時間の暇をつぶすために買って読んでいた文庫本に影響されすぎだな。

「先輩最近なにか良い事でもあったんですか？」

藪から棒にこの部下は何を言い出すかと思えば…んなもん全く無いね、俺の不幸そうな面が何時緩んだって言うんだい、絡み方が面倒な奴は女に嫌われるから気をつけろよ？

「いや～俺こと新座泰時という課の部下にも課の業務的なことばかりではなく雑談もしてくれるようになったじゃないですか、これは大きな進歩ですよもしかして今から出世とか目指しているんですか？」

この口角が上がりっぱなしな俺の部下その一は新座泰時なんていう歴史の教科書にでも載っていそうな古めかしい名前とは裏腹の砕けたキャラクターとその柴色の髪が印象的な俺の三歳下の後輩だ。

俺よりひょろりと長い背丈におちゃらけた物言いをする軽薄だがその実行動は言動と裏腹にどっしりと身構えてから受けて立つといった具合、人は見かけによらぬものだ。

「良かったっすねー先輩、今日はこのまま有給消化なんで休日すっよ？」

仕事なんてそんなもんで充分だ、それさ不安と不満を紛らわす為にあるんだよ。「最低限」これで十分じゃないか？

出世なんて考えてないし貰えるもんもらえて生活できればそれでいいと思っている現代っ子なのでそんなにも急に出世欲が芽生えたなんて言われても先ず持って出来ないだろ？

「考えるまでもなくいいえだろ最近の俺らみたいのは、ノーリスクノーリターンを望むよどう考えたって」

「無責任に責任を押し付けられるなんてたまったもんじゃないですよね～」

だなんて今時の若者トークに花を咲かせていても仕事はまるで前に進まないので新座のマシンガントークが始まる前にとっととおしゃべりを止めて数字とにらめっこをしよう。

全く、事務方に仕事押し付けやがって日頃の仕事の割り振りがおかしいからこういうことになるんだよいい加減にしろ…

「はぁ…責任は取るものでも持つものでもなく回って来るものなんだよ、それを回避するか飲み込まれるかは運とか次第だ。」

「でもその責任って濁流を飲み干せばいいんじゃないっすか？」「次はもっと重い責任がやってくる」

「人の上に…上に行く為にその清濁合わせて飲み干すだけの度量が必要とされるんですよね？…」

「あぁ、失敗して濁流に飲まれて消えてゆく人も少なくないがその末に待つ大切じゃないものをめざして突き進む」

ブルーライトというかもはやタイピングが難しくなってきたが腱鞘炎って労災おりるんかな？

「大切なものの代わりに消えてくれる大量殺人鬼の為に…ですか？」

「大量殺人鬼って言い方わりぃなぁ疲れるだろお前」「そりゃあそうですよあれって多分戦争以上に人殺してますよ多分」

　こんなことを話していてもきりがないのでこのあとどんな話をしていたかは割愛させてもらうとして応急措置的なことはすべてやった。

報告書がこれだけまとまっていれば多少の粗が見つかったとしても問題あるまい、後は復帰してくる事務方とお偉いさんに任せて俺らは有給休暇を消化しに家へ帰るとしよう。

「先輩、僕はこのグロッキー君を介抱しながら帰りますんですみませんがこっから別行動です、すみません」

別に謝るようなことじゃない、俺は徹夜して仕事してくれた奴にそれくらいでへばって情けない、俺の若い頃はななんて説教垂れるような余裕はねぇしそんなことしたくもないから安心しな。

「それじゃぁまた明日会いましょう先輩」

「ん、またな明日顔ちゃんと出せよお前ら…死ぬなよ？」

「そんな物騒なこと言わなくても今日一日寝てれば明日にゃ快眠明けでバリバリやってみせま…気持ちわる！」「あ～あ言わんこっちゃない…」

別れ際の挨拶にしてはもう疲れて適当な事を言ってしまったが構うまい、好感度なんていらないですしそれより大事なのはこの疲れた体と頭を引き下げて寝過ごしなどせずに借りたアパートまで約一時間半程意識を保っていなければならないという試練が待っている事だった。

「まじか～きっついなこれ」

栄養ドリンクシリーズをちゃんぽんしたからこれ以上肝臓やら腎臓に負担を掛けるわけにもいかないし…どうしたものか、

24時間ぶりに仕事とかいう苦行から解放されて外へ出るとやけに高く広がる大空とそこへ手を伸ばさんとする雨後の筍が身分不相当ににょきにょきと生えていて土台からすべてを引っこ抜いてひっくり返してやりたくなったが俺はそんなことよりはよ寝たいんだよ。

ここから早く去ることにしよう、せめてもの救いは昨日の時点で今日が有給休暇の奨励日で奇跡的に部下を含めて申請していた事だった。

　お天道様がゆっくりとお寝坊さんな顔を出して静けさと張りつめた冷たさは多少の目覚ましにはなるものの、この味気なく詰まらない灰色で飾られた街はどうにかならないな…余計なことなんて言わずにさっさと帰るか…

混濁しかけた意識を手放すまいと一先ず一番乗り換えの少ない手段で帰ろうと地下のホームで10分待ちぼうけを食らった以外は順調に事が運んで朝の連続テレビ小説位には帰ることが出来る…

と思っていた時期が俺にもありましたよ…えぇ、皆さんもしかしてと思っていたよな？残念ながらその通りである。

「おいおい、どこだよここ俺知らねぇぞ…」

残念ながらマイホームの最寄り駅から30分程の路線の本当末端部終着駅へ着いちゃったよどうするよこれまぁ折り返し待つか…

次の列車まで暇なので見分広める為に少しだけ外へ出て歩いてみることにした。

電車の中では寝られたが列車は車庫に入る様でホームからさっさと退場し寒空のなかで残された俺はどこか喫茶店でも無いもんかと動きたくないと嘆く体を酷使しながら歩く、回りは住宅街ばかりかと思ったら通りの向こうに日の光りを乱反射して輝く海の姿があった。

別に海なんてアパートから飽きるほど見られるというのに俺は文句の一つでも言ってやろうとローファーにスーツままで水平線へと駆け出していた。

全く山育ちのくせに何をやってんだと同郷から笑われそうだがそんなことは知らん、俺はとにかく海が見たいんだ。

「おらこの野郎勘弁しろよーーー！今日はすげぇ疲れてるけどなぁ、突然死にたくなったりとかしねぇぞぉー！」

全く自分でも何をしてるんだと空しくなるかもしれないが俺はその前に正気に戻って駅に戻ろうと振り返ったよ…

「あ～えっともしかしなくてもお邪魔したよね～これ」

砂浜まで行かずに防波堤から海に向かって叫んで誰もいないよなと保険をかけて振り返ってみたらうむ、人が居たよ…ほんまかいなと思うと同時に皆さんでご唱和下さい…せーの、どうしてこうなった…

今の問題は自己の精神のあれこれとかでは無くその心の葛藤を声にしたことだがまさか叫んだ砂浜に朝早くから出ようとしている人間がいるなんて誰が思うだろうか、俺は思わなかったからこんな恥ずかしい目に合ってるわけなのだがあれか俺もしかして今年厄年だったりするん？

「えっとまぁ…あれだよ別に気にすんなってなんも見なかったし聞かなかったから！そーいうことにしておくから…なっ？」

そう言うことってどういうことだよ待て待て、俺に弁明させろ背後からばつの悪そうに言うんじゃない。

振り返って防波堤の下にいた女の子(にしてはさっきの言い方は乱暴な気がするが)に向けて言葉を掛けた。

白のニットキャップに灰色のジャケット、余裕のある紺色のズボンを履いている、洋服には疎いので明確な名称までは分からないが…ボーイッシュというのか中性より男性よりなセンスをしている子だ。

「その格好はまさかこの寒空の下でこの海に入るってのか…？！」

ここら辺でそのボードを目にしたのは夏場だったがまさか冬場でも海に入る程波乗りが好きなのかこの子は…俺も大概だが君もだな。

「まぁそのまさかなんだけど流石にこの格好のままじゃないけどさ、

一度このボード持ってその格好したら凍死するまでは波乗りピエロってのは流石にジョークだけどもそれなりには趣味として頑張ったりしてるんだけど…さてはその顔は私のこと知らないな？ 」

すまないが

「まぁ日本じゃドマイナーなスポーツだし致し方ないとは思うけどそっかーまだまだぁなぁ私…なるほど公営放送に呼ばれた位じゃ一般の方には認知してもらえないと…」

いやいや、俺んちテレビ無いしそんなの見る暇あったら寝たり趣味やるよ。

残念ながら俺は専業主婦じゃないからね、家事の合間をぬって休む時間にテレビ見ることは出来ないんだよ。

「んーー、ならあれだ今便利なやつあるだろGoogle先生、そいつで調べてみなよ絶対出てくっから！」

「そんなことを急に言われてもねぇ…」

お前はそもそも誰なのって話なのだがこの子あんまり人の話を聞くタイプではなさそうだしな～、

「あー、私の名前？そっかー！名前も分かんないのに調べろなんて無理あるよな！なら早く名前聞いてくれれば良いのに！

私の名前はこいわだよ小さい岩で小岩、名前は…凪だよ小岩　凪、そんなに難しくないし覚えちゃってくれよな！」

日光を反射してピカピカと光が水面を映し出したかの如く朝から眩しく元気の良い笑顔を俺は久しぶりに見た。

そういや暫く会ってないけどいとこが今高校生だったか…どうだったかな？あいつも小さい頃はこんな風に笑ってた気がする。

「なんだよその初孫を可愛がるお爺さんみたいな顔、一応二十歳過ぎてるし…というかおっちゃん今幾つ？」

「お、おじさん…」

な、何ぃ？！齢三十路手前で何故におじさん扱いされなくちゃいけないんだよ？！そんなに老け込んで見えるのかね俺…

「あ…もしかしなくても気にしてた？」

きょとんとした顔しゃがって、気にしてたもなにも初耳だわ、確かに今日は疲れきっているにしたってそんなに俺老け込んで見えるのか…

しかしまぁ新卒の頃とか誰かに何かを習っていた今までの人生の半分超はお前らには輝かしい未来がある、多少の苦難も己の糧に変えていけ！と言わんばかりの目の前の光景に無性に腹が立った。

自分の苦労は俺自身が決めるものでそれで潰れるようなら世話無いから放って置いてほしいものだが他人事に巻き込まれて任された面倒事などそれこそ金が払われてもやるもんじゃないと俺はそう感じている。

「そうか俺自身はまだまだ若い気でいたんだがそうもいかないか…そうかおっちゃんか…」

疲れて言い返す気力が湧いてこないので適当な会釈をして帰ろうとするも肩を捕まれる、何かと思ったら…

「私も自己紹介したんだからそっちもしろよ…」

とのことだが俺はしがない一市民なので構わずに仕事に励んでくれたまえ…

「おいおいおいおい、どこへ行くんだよ？私だって自己紹介したんだからそこは名乗るのが礼儀じゃないのか？」

礼儀に強制権は無いので俺は正直なところ駅に戻りたい、礼儀なんてそんなものは人の良心次第で相手に期待するとかえって裏切られたりするものだから見返りを求めないことが礼儀にあたるのんじゃないかなんて…ああ、嫌だ嫌だ、哲学者の真似事なんてするもんじゃない。

「あー分かったよ個人情報漏洩なんて自らするものじゃないんだがなぁ…」「それ本気で言ってんの？」

「ああ、本気も本気大真面目さ、世の中それだけの情報を売買するような商売もあんだよ。住所氏名電話番号をリスト化するといい小遣い稼ぎになるんだぜ？社会は今そんな感じだが…

「なにそれこっわ」

まぁ、折角その手の有名人とプライベートでお近づきになったんだから恩と名を売っておけば後々…なんて打算は無しにして改めまして

「えっと…小岩凪さん、俺は吉川南斗と言う…吉報の吉に川、南に北斗七星の斗で南斗だ。

ありがちなのか珍しい名前なのかの判断は君に任せるけど因みに二十七歳ね」

こんな自己紹介で良いのかと言えばその通りかもしれないがまあ別に知り合いになったとて二度と会うこと無いだろうし別に構いやしないよ。

簡単な略歴書でも話そうと思ったが彼女に何か考えがあるようで、それならと俺は言葉を濁して小岩さんにターンを譲る。

「うーん？名前に珍しいもなにもないんじゃないかな、同姓同名とかいるけどまるっきり同じような人なんていないから卑下すんのは良くないって思う…ます」

敬語になったのは俺を歳上だと再確認したからだな、よしよし

その機転の速さは嫌いじゃないぞ。

「とかそんな事はよくってさ折角だし調べてみてよ私の名前ほら持ってるでしょスマホ！」

いやいや、別にこのままほなさいなら～で良かっただろ、何ゆえ期待した眼でこっち見てるですかね？

「ほらほらぁ、何か見られたら恥ずかしいものでも入ってるんじゃないの？」

やだ…この子耳年増…って程じゃないか、二十歳って言ってたし、

それに俺は会社勤めのサラリーマン、見られたらいけないものの一つや２つあるのは当たり前なのだ。

「あぁ～あるわ(会社のデータが)」「え！？」「流石に見られたら俺最悪なら捕まるし(インサイダーとかで)」「つかまるの！？」「そりゃぁ…流失したら不味いもの入ってるし」「あぁ～そう言うことか～」「ん？なにか含みがある言い方だけれど他に意味合いでもあるのかなん？」「な、ないない～」「ならいいんだが…」

某先生のサイトを見てみる前に一応有名なスポーツ誌の記事を見つけてさっと流し読みしたらば簡単に言えば女子の世界タイトル戦を一気に踏破した超新星で今まで大会へ出場しなかったのは時間がなく、自分の実力がどんなものなのか分からなかったという天才肌こ人物だった。

まじかふっつうの女子高生か何かかと思った。

「なんだよ、人の顔みて溜め息ついて～失礼だぞ？」

不満そうな顔をする小岩さんを「えー」とか適当にあしらっておく、こいつは本物か…本当なんだから仕方がない、けどもそうと分かった途端にどうにも埋められない溝が俺の目の前の女との間に出来たと感じてしまう、天才は天才なりに凡人とは違う苦労をしているしもっと言えばそんなに変わらないのだろうが俺は残念なことに人を区別する人間で分け隔て無くとか来るもの拒まずとかは出来ないんだよ。

「ところで吉川さんって今時間ある？」

藪から棒に何を言い出すかと思えば、時間がないわけでは無いが正直疲れてるからそれどころじゃない…やぶさかだし。

「ははーん、その顔は暇だけどお前にかける時間なんざねぇって感じの顔ね！」「いやそう言うことじゃな」「よっし。寝ないように注意してちょっと私の乗るとこ見ててよ！！」「…まじ？」

「当たり前田のクラッカーだ☆」「なんだそれ聞いたこと無いぞ？」「えー！？おっさんから知ってると思ったのにぃ？！」

「だからそのおっさん呼ばわりを止めろください、心に来るんで俺まだ三十路位なんで許してな？」

その後のすったもんだの末に結局は俺が折れて小岩さんのサーフィンを見ることになったがこれはチャンスだ、なぁに難しいことじゃない、小岩さんが夢中になっている隙にそのまま帰ってしまえばよいのだ。

なんてて声に出した覚えはさっぱりないのだが勘が鋭い小岩さんに携帯を取られ返された時にはちゃっかり某緑のSNSに「NAGI」と書かれたアカウントが友達登録されていて…

「取り敢えずまぁ、ブロックするならしてもいいけどしたら私いたる所で吉川さんに話を匿名で拡散しちゃうかもなぁ～、私これでも結構拡散力あるからねぇ～」

意地悪く歯を見せて笑う小岩さんは近くで見るとそのアスリートらしいしまった体つきやら、実は彼女の目の色がよく見てみると光の加減なのだろうか反射したほんの少しだけ紫色の光彩が瞬いた、外人の目で青い目やグレーの目くらいは見たことあるがあるが青い紫がかっている。

それは確実に俺の知っている黒の色ではなく、その中に収まって映る光源と美しい宝石を見ているかのようでこの瞬間に俺はアメジストの鉱脈でも引き当てたのだろうかとふっとその変な考えが頭を過ぎって海中へ没していった。

「そうか…そりゃあ怖い、俺も気をつけないといかん、何処で誰が悪意か善意を持って見ているのかわからないからな。　そう考えるとだ、少なくとも世間に多少なりとも顔をさられてる小岩さんがこんな朝早くに三十手前のおっさんと逢引なんてしないで俺はそこらへんの喫茶店で一旦眠りこけてから家へ帰るとしようかな？」

「そうはさせないにきまってんじゃん。ほらほら、そっちのベンチにでも腰掛けてちょっと見ててね～」

だから近いんだって顔が、なんだってそんな紫紺の目の色しているんだよ、珍しいもんは見ていたくなっちまう質だから見入っちまうから駄目だって、

人にとって世界はどれだけ輝かしいものに時に見えるのだろうか、隣の芝生はとにかく青く映るものだがそこに朝晩欠かさず水をまき玉の様な汗をかきながら雑草を抜く姿は頭に入っていないんだよな…

「ほいほい、おっさんは動くと疲れるから寝落ちしない様に見てるからいってらっしゃ～い」

そう言いながらベンチへ腰を落としてふぅ…と一度溜め息を空に向かって吐いてやった。

「な～んだ結局見るんじゃん、それともおじさん案外ミーハーだったりするの？」

ミーハーねぇ…そんな事は今のところは言われたことないなぁ、

どちらかと言うとKYとかいう死語を言われた回数の方が圧倒的に多いと思うぞ？それとおじさん言うな。

「座るときによっこらしょとか言ったら「やーい、おじいさんなん」てからかってやろうかなって思ったけどなー残念！」

誰がじじいだまったくこいつは…俺の親父ですらおじいさんと言うにはおこがましいぞ。

やれやれ、ここまでフランクな奴も今時珍しいもんだなと感じて腰を落とす体勢に入った時だった、小岩さんがサーフボードを放り出し俺の重心を崩しにかかって手を引かれた俺はものの見事に砂浜をサーフィンしてしまった…だなんて淡々と語ってもダメだなこれ、むっちゃ砂が口のなかと服のなかに入ってきてなんか急に弱音を吐きたくなった…はぁ、わりと何でも無いことで人って心が折れるんだな。

「あ…えっと…まさかものの見事に転んじゃうと思ってなくって…謝らせてくれますか？」「」「む…無言は寂しいので大声で怒鳴るとか来た道戻るとかしてくれません…？」

素直に謝ろうとする辺り良い子だね、よしよし仕方ない。

俺は疲れるからね声をあげる元気も無いんだと言うことにしておこう、

「うん、まぁ特に気にしなくても大丈夫」「ほ、本当に？」

「大人の寛大さなめんなよ、これくらい上司とか取引先との板挟みにあってやり取り繰り返すよりよっぽどましだぜ、しかし口のなかスッげー苦いから駅前の喫茶店でなんかおごってくれな？」

朝陽にやっと出逢えたみたいな顔しやがってにっこにっこしたって俺の疲労は少し位しか回復しねぇぞこの…思わず冬場なのに真夏の向日葵思い出したじゃねえか…なんでだ？

「よーし！ なら私のオススメを折角だから広めるチャンスね！」

そう言いながら遠ざかる小岩渚を俺は明るい方の溜め息で送り出す、なんだよちくしょう少しは海も良いことしてくれんじゃねぇかよ…なんてぼやっとした思考が散漫になった頭の中で小さく火花を上げていたのである…。

目の前に広がる景色に意識が睡魔に誘拐されそうになりながら俺は一体何をしているんだろうかと朝方にも関わらず黄昏ていた。

断続的に寝ていたせいもあり意識があまりはっきりしない、鴎やらうみねこがにゃーにゃー呑気な声で鳴くのを聞きながらふんわりとしたまどろみに包まれかけていたが…

「ほーら、まだ寝るなって！もうそろそろ始まっから！！」とまぁこんな様子で海の方から元気な声が飛んで来て睡魔を追い払う。

なんだってまた徹夜帰りに波乗り見なくちゃいけないんだとの不満の声は絶賛頭の中で生き延びているが休息を急いだって仕方ない。

徹夜コースは初めてだったが休日に趣味に没頭あまり寝損ねたことだってあるし、明日ゆっくりすればいい。あ、でも洗濯物干したいなぁ…

ぼおっとそんなことを散漫に考えてみる、何時もいつも義務感で行動していたから手綱を離されてレールの上から離れるとなにをすれば良いのか途端に分からなくなる。

「なんだよ何をそんなに思い詰めることがあるんだよ、今日は晴れてんぜ？テンション上がるだろ吉川さん？」

砂浜からいつの間にか海から上がっていた小岩さんが此方へサーフボードを担いでこちらへ向かって来ている、どうしたんだろうか？

「どうしたもこうしたもそんな調子じゃあ折角のやる気もどっか他所行っちまうって」

「と言われてもなぁ、楽しそうな顔すると違和感あるとか良く言われるんだよ」

「うーん？そんな怖い顔じゃないですよ吉川さん」

「いや、普段表情筋がストライキ決め込んでるおかげで違和感凄いんだってさ」「あー、あれだ仕事もーどだ！」「いや知らんがな」

なんだろう、最近は考え事やらが多くなって気がつくと時間が過ぎているパターンがあるのだが今までこんな事は無かったから正直な話困惑している。

「吉川さんってさ、学生生活楽しめた？」

小岩さんがサーフボードを浜に突き刺して俺の座るベンチの横に腰掛ける彼女の方から濃い海の匂いが鼻をくすぐる。

「うーん、どうだろう？馬鹿騒ぎに付き合わされるわ、今の会社の後輩と知り合ったり…と散々なようなきもするしそうでもないなと思ったりもする。」

なんとなしに沖へ向かう鳥を目で追って目線を足元まで落とし、小岩さんが話を聞いてくれる事を確認して俺は話を続ける。

「まぁ大体人は過ぎた事を美化したり嫌な事は案外覚えて無いから問題ないって思う、何か悩みの一つでもあるんだとしたら俺からのアドバイスは期待せん方がいい、正論やら身も蓋もないボールしか帰ってこないからな」

説教を垂れるようになるとは俺もいよいよおっさんの仲間入りか…

デリカシーのないやつにはなりたくないが人の機嫌ばかりを考えるのは駄目だ、自分が消える。

「ふーん、ねぇ吉川さん、人と付き合っていくのって結構考えること多いね」

彼女は今まで見せて来た水面の様に眩しい表情ではない夕暮れ時の顔を見せて俺を驚かせた。

「こ、小岩さん…もし人との事で悩んでいるならそこまで気にやむもんじゃない学校よりも広い世界を君は既に知ってるだろ？」

人間なんて関係を持ち続けられる人数はそう数は多くない。

しかしまぁごくたまに特異な人がいて単純に八方美人と言うわけではなく惹きつけて止まない特性があったりするのだが残念ながらそんな人物に俺はなれないんだろうな

小岩さんは一瞬目を丸くしたと思うとわはははと豪快に笑い始めたので一体何があったのだろうと思っていたところゆっくりと一回息を吐いて俺に向けて

「な～んかここまでお見通しだと誰かの差金なんじゃないかとかそう思っちゃうんですけど私の知らないヒトな気がしれないわ！」

波乗りに来たはずなのにもかかわらず彼女はこちらを食い入るように見つめているのでなんとも調子が狂ってしまう。波乗り少女きみはそれでいいのか？

「そんな訳ないない、もし俺が仮に君のファンか何かだとしたら憧れの存在に対してこんなづけづけと話をしたりなんかしないよ。もしそうだとしたらよっぽどの演技派なやつだな」

とはいえ俺は演技などとは無縁なのだが小岩さんは知らないだろう、俺の最終芸歴は長靴をはいた猫を最序盤でナレーションで向こう岸に到着するまでアドリブでマイクなんて入らない中で小言を二十秒ほど話すだけの船頭だぞ？

因みにそれ幼稚園だかせいぜい小学校のときだからなあんまりやった覚えがないのが本音なのだ…

「そうね、そういうことにしーとこっと！！」「そーいうことねぇ…」

「そんなことなんて割とどうでもいいんだけどさ、私に今悩みがあるように見えたって言ったけどもしかしてそれってさ！それってさ！聞いてもらえたりするのかねワトソン君！」「誰がワトソン君だっていうんですかね…」

ニコニコして意味がちょっとというか大分良く分からないのだが俺はそこまで懐かれる要素ないだろうが一体何が起きてる…？

アレもしかしてこれってまだ電車の中で俺寝てるじゃね？自分の理解の範疇を超えた出来事があると人間は何かにつけて結びつけてしまう癖がありそれが「運」ではないかと個人的には思っているのだ。

つまり人生は良いことと悪いことが比率として同じように起こっており結局はどんな人生を辿ろうと皆おしなべて一緒であると…なんだかなぁ～

「でもでも流石に初めてであった人に渡しの悩みを聞いてもらおうだなんて思わないケドネー」

それはそうだろ、ヒトはそんな簡単に信用しちゃいかんむしろ信用する必要がないまである。

「そりゃそうだが風があんまり強くなる前にカフェにでも入りたいんだこっちとしては暖かい飲み物でも奢ってやるから小岩さんの得意分野をぜひ俺に見せてくれ」

素人目の感想しか帰ってこないんだがそれで良ければ波乗りでも玉乗りでも見てやろうじゃないか、海の上で板一枚で立っているだけですっげーと思うんだけどね。

「俺は軽率に人を褒めるから気をつけろ、他意と故意もなくただ自分にできないことに対して賞賛を送っているだけだからあんまり大きく捉えないほうがいい。

プライベートだと思ったことが割とぼそっと思っていることを口にしてしまうから注意したほうがいいぞ」

独り言を言った数だけなら多分この空は全部オレの独り言で埋まってるな多分、

「正直なだけじゃお金は貰えないから仕方ないよ、

よーし、それじゃ行って来まーす！」

「い、行ってらっしゃーい」

元気だなあ、この歳で既に元気ってなんだっけと幸せ並みに探しがいがあるものになりつつある、

小岩さんが砂浜を足取り軽く飛び出して行ったのを見ながら俺はそんなことばかり考えていた。

黒潮エトピリカ　第一集　終わり

次回遠浅ブルーハワイ